

という人が多い。

女生徒のために一時期男子生徒に做った黒ないし紺サージの制服と襟章が作られたこともあったが、生徒が反対したため普及しなかった。恐らく粗悪品だったのだろう、満員電車から降りたらボタンが一つもなかったという話もある。物資不足の折り、毛布で作った上着やズボン、焼け残りのカーテンで作ったブラウス、敷物マットで作った靴等々、みな有り合わせのものを着て登校した。

男女共学になったとは言え、昭和二十年代の学生生活は困難の多いものだった。そうした困難を乗り越えさせたものは、若さと向学心、新しい時代への期待であったと言えよう。第一回女生徒三十七名のなかには病死した者、病氣や結婚その他により退学した者も多く、順当に卒業したのは二十七名であったが、努力家が多かった。油画科の卒業制作の採点の結果、トップは勿論、上位は全て女生徒が占めたという。

⑨ 校友会の復活と芸術講座

昭和十六年、校友会が報国団に組織替えされて以来、課外活動は極めて制限されたものとなり、体錬の方面に比べて文化方面の活動は殆んど火が消えたも同然となった。昭和二十年九月、文部省は学報報国団を解体して自治的校友会に再編するよう指示し、そのため本校生たちも翌二十一年五月十日、入学式の後で学生大会を開催し、ここに校友会が復活した。そして、戦争中の文化的空白を埋めようとするかのように七月三日から十一日にかけて講堂で校友会主催の芸術講座（公開）を開いた。当日は先ず上野直昭が開会の挨拶



戦後しばしば来校した藤田嗣治
(本校玄関前にて仁田三夫氏撮影)

をし、その後式場隆三郎、梅原龍三郎、藤田嗣治、小宮豊隆、小林秀雄、遠山孝、高見順、今日出海らが講演したと記録にある。この夏には美術研究所も夏期美術講座（七月二十五日～三十一日）を開き、帝室博物館も日本美術史講座（七月八日～十三日）を開いて戦後の美術活動の再生を期したが、本校における芸術講座はそれらに一步先んじて開かれたもので、しかも期間も長く、若者の希望によりバラエティーに富んだ講演者が選ばれた。担当の生徒が講演の依頼に行くと、皆喜んで引き受けてくれ、また、文化的催しの殆んど無かった時代であったから、聴衆も多かったという。

⑩ 高山夏期研究会

昭和二十一年七月二十日から九月二十日までの間、飛騨高山で夏期研究会が開かれた。宿舎には工芸技術講習所宿舍だった林家が選ばれた。高山行きの計画は、はじめは山岳部が発案して参加者を募ったが、学校側がこれを知り、学校の行事として実施することに